

オノデラユキ 写真の迷宮へ

Onodera Yuki INTO THE LABYRINTH OF PHOTOGRAPHY



Transvest 2002-

会期 2010年7月27日(火)～9月26日(日) 54日間

会場 東京都写真美術館 2階展示室
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3
恵比寿ガーデンプレイス内
TEL: 03-3280-0099 www.syabi.com
JR恵比寿駅東口より徒歩約7分/東京外口恵比寿駅より徒歩約10分

主催 東京都 東京都写真美術館/読売新聞社/
美術館連絡協議会
特別協賛 キヤノン株式会社
協賛 ライオン/清水建設/大日本印刷

開館時間 10:00～18:00

[木・金は20:00まで/入館は閉館30分前まで]

休館日 毎週月曜日
(月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)

料金 一般 700円(560円)、学生 600円(480円)、
中・高生、65歳以上 500円(400円)

東京都写真美術館友の会会員/小学生以下/障害者手帳をお持ちの方
と介護者/第3水曜日に観覧する65歳以上は無料

■展覧会概要と見どころ

— 「写真」の迷宮へ —

オノデラユキ(1962生まれ)はパリを拠点に、世界的な活動を続ける写真家です。独学で写真技術を身につけ、1991年第1回写真新世紀展優秀賞を受賞、写真家として頭角を現しました。イメージを重ねた幻視的な作品で「謎めていることは貴重である」と評価され、その作品の本質は1993年パリに拠点を移すことにより更に力強く磨かれていきました。そして創意溢れるシリーズを次々と発表、2003年、写真集『カメラキメラ』で第28回木村伊兵衛賞を受賞し、さらに2006年にはフランスにおける最も権威ある写真賞「ニエプス賞」を受賞しました。

オノデラの作品は、「写真」という一般的概念に収まりきれないところに、その魅力と特質があります。それは写真表現の可能性に果敢に挑戦してゆくオノデラの尽きない探求心に支えられています。ある時はカメラに細工を施し、ある時はコラージュによって、ある時は思わぬアングルから被写体をとらえ、コンピューターを使用したり手彩色を施したりと、シャッターを押すまでに行われる作り込みは、まさに造形作家の作業です。それらを一度カメラという機械を通して1枚の画面に封じ込め、最終的に自らの手で現像し写真作品として完成させるのです。

オノデラの作品は、日常の風景を捉えながらも、私たちの固定観念を覆すような視覚世界を体験させてくれます。そして、独自のユーモアと都会的なセンスで巧みに観る者を惹きつけながら、私たちを写真の迷宮へ誘うでしょう。

本展ではオノデラユキの初期代表作に東京都写真美術館新収蔵作品「Transvest」、「12 speed」を加えた9シリーズ60点で展覧いたします。

■主な展示作品（*は東京都写真美術館収蔵シリーズ） ※点数は展示点数(詳細は別添リスト参照)



「古着のポートレート」 1994-1997年
ゼラチン・シルバークラウド 115×115cm 計9点 *うち5点
パリのアパートから見える空を背景に古着を撮影した作品。この古着は、フランスの美術家クリスチャン・ボルタンスキーが個展「離散/dispersion」(1993)でナチによる大虐殺の悲劇を暗示するために山のよう積み上げた古着の一部である。ボルタンスキーが死の象徴とした古着を、オノデラは身体なきポートレートとして、一点、一点窓辺に立たせて撮影した。オノデラユキの初期の代表作品。

古着のポートレート 1994-1997

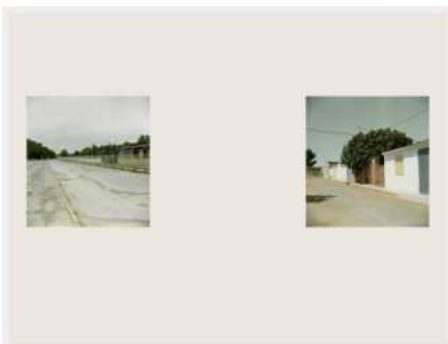
「窓の外を見よ」 2000年 ゼラチン・シルバークラウド 59×49cm 計5点
暗黒の空間にぼつりと佇む小さな家。窓からは家の明かりがほんのりと輝いている。写されている家はどれも現代の日本の家だという。ヨーロッパスタイルや、北欧スタイルなど時々の流行を反映して建てられたものだが、作品では空間とのバランスゆえ、おもちゃの家のようにも見える。一世代で建て替えられてしまいきそうな、オノデラいわく「命の短かそうな家」が被写体として選ばれた。これらの家々は暖かくも、はかなげな家族の絆、人間の命を暗示しているかのようだ。

「真珠の作り方」 2000-2001年
ゼラチン・シルバークラウド 210×150cm 計3点 *3点
昼間の街の群衆を写したものだが、群衆は闇に覆われ作品の上部にぼんやりとした白い玉が映っている。これは、カメラに小さなガラス玉を入れて撮影したことで、引き起こされた効果である。ガラス玉が光を集め乱反射し、人々はまるで暗闇に居るように見える。オノデラユキはカメラにガラス玉を入れることで被写体と撮影者の間にあるカメラという暗箱の存在を意識させた。カメラの暗箱の中でおきたアクシデントは現実の風景を幻影と変える。貝に異物を入れて真珠をつくる行為になぞらえてこのタイトルがつけられた。縦2メートルの大型プリントは鑑賞者みずからカメラの中に入っているかのように感じさせる。



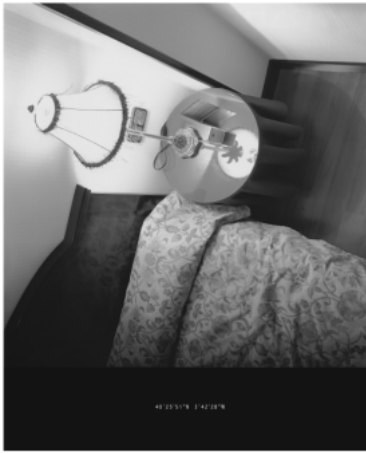
真珠の作り方 2000-2001

「Transvest」 2002年 ゼラチン・シルバークラウド ex.190×126cm 計5点 *うち2点
様々な人間のシルエットで構成されたシリーズ。2002年に始められ現在も制作が続けられている。このシルエットは生身の人間を撮影したのではなく、雑誌等に掲載された既存のイメージを引用している。更に目を凝らしてみるとシルエットは単なる影ではなく、そこには様々なイメージの断片が詰め込まれている。夜の街の街頭や、顕微鏡の写真、本から複写した風景などであるが、それらは、かろうじて見えるところまで、黒くつぶしてあり、照明のあて方次第で見えたり、見えなかったりする。「Transvest」は異性の服を身につけたがる「服装倒錯」という意味の医学用語。典型的な人間の属性を示すシルエットであるが、その細部を見れば見るほど謎に包まれる作品。



Roma-Roma 2004

「Roma-Roma」 2004年
ゼラチン・シルバークラウド、油彩 37×49cm 計10点
*うち2点
イタリアのローマではない、ローマという名の場所をステレオ・カメラで撮影した。2つレンズが付いているステレオ・カメラの特性を用い、一方でスウェーデンのバルト海の島のなかにあるローマを、もう一方でスペインにあるローマという場所を写した。写真を撮るために移動することが最大の関心事であったため、それ以外の恣意的な判断を避けるために、地名とステレオ・カメラを使用するという事だけ予め決めて撮影に挑んだ。カラー写真ではなく仕上げに油彩で手彩色している。



オルフェウスの方へ 1-失踪者の後を追って- 2006

「オルフェウスの方へ 1-失踪者の後を追って-、2-不思議な距離-」 2006年 ゼラチン・シルバークラウド 144×117cm、ポラロイド 41×38cm 各4点
 実際に起こったホテルの密室失踪事件。オノデラは事件後、同じ部屋に泊まり行方不明になった人物に思いを馳せながらこの作品を制作した。彼女の推理は、行方不明の人物はこの部屋が立っている地上の真裏、すなわち下方に移動してしまっただけではないかというミステリアスなもの。これを機にオノデラはその部屋の地球の裏側に位置する場所に行き、ポラロイド写真にその地面を収めている。我々の視線は日常的には水平に向け世間の表層を眺めているが、あえて垂直方向に視線を向けることで、あらためて宇宙の神秘を意識させる。

「11番目の指」 2006-2010年 フォトグラム、ゼラチン・シルバークラウド ex. 182×124cm 9点
 人間が無意識に行う身体の動きに着目し、ノーファインダーで撮影した作品。さらに顔を隠すことによって、日常のなかで行っている動きの意味をあえて見えなくし、不自然さを表した。被写体の顔にはレース状に穴が空けられた紙が、フォトグラムの技法を使って白く焼き付けられた。タイトルの「11番目の指」は、10本目までが被写体の指であり、11本目は撮影者のシャッターを押す指をさすという。



11番目の指 2006-2010



アニューラ・エクプリス 2007

「アニューラ・エクプリス」 2007年
 シルクスクリーン ex. 254×150cm 3点

シルクスクリーンの作品として2007年に制作された。縦が2メートル50センチに至る大型作品で、中国で刷られ上海美術館で発表された。人間や動物のシルエットがコラージュによって構成された作品だが、巧みに表現された影を通じ、実存する身体を感じさせる作品である。この作品において衣服の装飾が、例えば夜の街の灯を写した写真のコラージュで表現されている。「Transvest」(2002-)シリーズに通じる作品である。



12 Speed 2008

「12 Speed」 2008年
 インクジェットプリント、ゼラチン・シルバークラウド 124×171cm 各4点 *うち2点
 濃いピンク色の壁面と同色のテーブル。その上にはヘッドホンやスナック菓子の袋、コップの牛乳やビーズで編まれた犬の人形など、女の子の部屋に散らばっているようなポップな小物が目立つ。その中央に置かれた丸い鏡。オノデラはこれらのセットを森の中に設置して撮影に挑んだ。森での撮影を証明できるのは、唯一鏡に映った森の木々である。同一のセットで鏡の向きを少しずつ変えながら連続12点撮影した。鏡は人工的な空間の中央に空けられた風穴のようにみえる。壁面には落書きのような矢印と暗号めいた文字が描かれている。キッチュなグッズ

の組み合わせにもかかわらず、古典絵画の静物画を思わせる堂々とした風格も感じさせる。暗号めいた文字は「永劫」を意味するという。

■オノデラユキに一問一答

Q. 写真の魅力を感じた印象的な出来事は？

A. 写真の面白さの本質はメイン・ストリート的なところではなくて、言ってしまえば裏道的なところにあります。

私は子供の頃、父が作り上げた写真アルバムを見るよりも、そのアルバムに貼られずに見捨てられた雑多なプリントが入ったブリキのお菓子箱の中身を覗くほうが好きで、時々開けては見て楽しんでいました。白黒、カラー、大小、様々な時々の被写体の写真がバラバラに箱の中に詰まっていた。アルバムと違ってその中のカオスを見るたびに違う印象を与えてくれたのを覚えています。ではなぜそんなに面白かったのか？子供の私にはわかりませんでした。今から考えるとあの箱の中身は、本来的な写真の使命とも言える、記録する、分類する、位置づけるという役割から解放された、ただの世界の断片の集積であって、写真の不思議さとその都度得られる発見の楽しみなどが、まさに、その箱に詰まっていたからかもしれません。案外私の脱写真的行為と言われる部分はそんな既存の写真の本来性から外れたものに対する直感的な興味が源泉となっているのかもしれないのです。

自分の写真を棚に上げて言うのも何ですが、私にとって写真は古ければ古いほど魅力的です。シャッタースピードが遅く、身構えて撮影された19世紀の肖像写真のモデルの眼差しには独特の魅力があります。己が写真化されることに対する戸惑い？それとも未知な現象に対する興味？それらの肖像写真には、その時間やモデルの人格までもが内包されているようです。

それは現代の瞬時になんでも捉える機動力のあるカメラと、自分の顔を予想されたイメージどおりに写真に変換することにたけている我々と、かけ離れた遠い出来事のように思えます。実は私はいま「はたして私たちは写真の発明以前に遡れるか？そんな事件を写真というメディアを使いながらも実現出来るだろうか？」というSF小説じみたことに興味をもっているのです。

Q. 作品のアイデアは、どのような時に思いつきますか？

A. 私の場合、アイデアを思いついたくその時よりもそのアイデアをアタマの片隅に捕獲？したまま熟成させるその熟成期間の方が重要です。時間の中でアイデアは成長、変形、ときには突然変異を起こします。4、5年熟成が必要なケースもあります。そしてある時、現実化できるという確信が得られるのです。そうすると具体的な作業に入ります。たとえば「Transvest」は当初、昆虫の擬態への興味がどんどん膨らんでいき、それがテーマとなって考えを巡らせていたのです。そのうち擬態がファッションへ、昆虫が人間へと変化していきました。真珠のシリーズではカメラの中にビー玉をいれて撮影していますが、蚤の市で手に入れた革張りの箱形カメラをいじくり回していた時、宝石箱のように箱の中に何かを入れてみたくなったのがきっかけですね。



窓の外を見よ 2000

Q. オノデラさんの作品には、どうして浮かんでいるものが多いのですか？

A. 私たちは重力のある世界にいるので、ついでに浮かんでいるところ目が行ってしまうと思うのですが、他の意味でも私の作品はすべて浮かんでいるんです。視覚的に被写体が浮かんでいない作品でもそれらは地盤に足をつけずに浮かんでいるような、そうとも言える内容を持っています。そもそも確固とした地盤と言われているものだってひとつのフィクションのようなものではないかと考えれば、足をつけていてもつけていなくてもどちらでも浮遊しているようなものです。ただ視覚的に違和感や開放感を感じさせる浮遊は、鑑賞者にとっては作品と自由に対峙するきっかけ、牽引役となっているかもしれません。なんか変だな、という感じでじっと見入ってもらえる。そうすると色々見えてくるのです。

Q. カメラという機械の仕組みにも早くから興味があったのですか？

A. 最初の頃はライカM3を使って写真を撮っていました。すべて手動操作のカメラなので、シャッタースピードと絞りの関係が初心者にもよく理解できました。最初から現像もプリントも自身で行いましたので、製作の中でカメラや引き延ばし機という装置がどのように関わるかがとても明快でした。それで私にとってカメラはただの機械であって、それは常に撮影者と被写体の間にあり、光学的に枠内の事象をとらえ、化学的に定着させるものと認識していました。我々はカメラで捉えたものが「現実」に近く、描写力にもすぐれていると思わされていますが、決してそんなことはありません。人間が肉眼で見たものは、むしろ、そう、デッサンなどで描写した方が「わたし＝主観が見た現実」に近いものを再現できるように思えます。カメラにはレンズの特性やフィルムの感度などの規制が多く、なかなか見た目どおりに撮れないことは誰もが体験していることでしょう。それを技術で現実のように仕上げるのが一般的にプロの仕事ともいえますが、私はそのようなプロにはならず、カメラで捉えたものはカメラの前にあったものとイコールではないというのが前提となって、写真がその場所と時間からも乖離していくままに任せ…つまり受動的ともいえる姿勢を写真行為としているのです。

Q. プリント作業で一番大切にしていることは？

A. 暗室でのプリントは化学的な方法に従いますが、その際にたとえば非常識な手段やタブーと言われるプロセスなどをあえて独自に考えて自分の技術として取り入れていますから、それが表現効果となっています。暗室の道具も自分で手作りします。私にとって「イメージ＝画像」はプリントとして物質化した時に「写真」になります。どのように物質化するかは、油絵などと比べるとマチエール（素材によってつくり出される効果）がほとんどないのが写真ですが、紙である限りその微細な表面にもマチエールは確かにあるのです。その仕上げまでが私の仕事です。イメージ、ましてやデジタルイメージというのはそれだけでは存在しない、すぐ消えてしまう幻のようなものではないでしょうか。

(2010年5月 インタビュー)

■関連イベント

○アーティストトーク(作家による作品解説)

日時：7月30日(金) 14:00～ 会場：2階展示室

本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入り口にお集まりください

○オノデラユキのスライドレクチャー <初公開!アートな写真のひみつ>

日時：9月4日(土) 14:00～ 定員：70名 会場：1階創作室(アトリエ)

当日10時より当館1階受付にて整理券を配布します

○担当学芸員によるフロアレクチャー

日時：第1・3金曜日 14:00～

本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入り口にお集まりください

■海外での個展情報

ソウル写真美術館(韓国) 2010年9月11日-12月4日

ニエプス美術館(フランス) 2011年10月15日-2012年1月22日

■関連書籍「オノデラユキ」

本展出品作品に上記のソウル展、フランス展出品作品の「ミツバチ-鏡」「C.V.N.I」「P.N.I.」「関節に気をつける!」「液体とテレビと昆虫と」を加え約120点の作品を掲載した書籍を発行します。

「オノデラユキ」 淡交社 B5判変形 216ページ 2,800円(税込) ※日本語版、英語版

■お子様の美術鑑賞に「鑑賞ワークシート」

オノデラユキの作品の魅力を、クイズ形式で楽しく紹介する「鑑賞ワークシート」をご用意しています。夏休みの美術鑑賞や、美術クラスの団体鑑賞に最適です。(参加者には特製シールを差し上げます。)

■オノデラユキ 略歴

< 展覧会歴 >

主な個展

- 1993 「白と玉」 細見画廊、東京
- 1995 「DOWN 第一部—液体とコップ」 ツァイト・フォト・サロン、東京
「DOWN 第二部—古着のポートレイト」 ガレリア・キマイラ、東京
「DOWN 第三部—鳥」 Aki-Ex ギャラリー、東京
「古着のポートレイト」 フランス・モード研究所、パリ
- 1997 「DOWN 三部作展」 ラージュ・ソロモン・ギャラリー、パリ
- 1999 「オノデラユキ展」 群馬県立近代美術館、高崎
「C. V. N. I.」 イル・テンポ、東京
「P. N. I.」 ツァイト・フォト・サロン、東京
- 2000 「C. V. N. I./P. N. I.」 グラニ劇場ギャラリー、ベルフォール(フランス)
- 2001 「真珠のつくり方・Zoo」 ツァイト・フォト・サロン、東京
「窓の外を見よ」 イル・テンポ、東京
- 2002 「真珠のつくり方／窓の外を見よ」 RX ギャラリー、パリ
「Transvest」 〈Transvest〉〈液体とテレビと昆虫と〉 ツァイト・フォト・サロン、東京
「ミツバチ—鏡」 イル・テンポ、東京
- 2003 「Transvest」 C・スクエア、名古屋
- 2004 「Transvest」 クイックシルヴァー現代美術ギャラリー、ベルリン
- 2005 「オノデラユキ写真展」 国立国際美術館、大阪
- 2006 「オノデラユキ展」 上海美術館、上海
「オノデラユキ展」 コンラーツ・ギャラリー、デュッセルドルフ
「ニエプス賞 2006」 ナント写真フェスティバル、メディアテーク、ナント
- 2007 「オノデラユキ」 クムサン・ギャラリー、ヘイリ芸術村、韓国
- 2008 「オノデラユキ」 ネイリリーヒト・アート・センター、デュドランジュ、ルクセンブルグ

主なグループ展

- 1992 「第1回写真新世紀」 P3 art and environment、東京
- 1993 「日本の前衛写真家」 誠品芸文空間、台北
- 1996 「第6回モード写真フェスティバル」 ベルビュ・センター、ピアリッツ(フランス)
「第21回コダック写真批評家賞展」 パッサージュ・ド・レッツ・ギャラリー、パリ
- 1997 「揺れる女／揺らぐイメージ: フェミニズムの誕生から現代まで」 栃木県立美術館、宇都宮
- 1998 「第2回モスクワ写真ビエンナーレ」 アート・メディア・センター・TV ギャラリー、モスクワ
「メディアログ: 日本の現代写真 '98」 東京都写真美術館
「所与と虚構」 国立写真センター、パリ
「ひとつの不完全な歴史: 日本の女性写真家たち 1864-1997」 ヴィジュアル・スタディーズ・ワークショップ、ロチェスター
- 1999 「ヘルテン国際写真フェスティバル」 ヘルテン(ドイツ)
「日本の現代写真」 新ベルリン美術協会他
「離れた場所」 サン=プリエスト現代美術センター、リヨン
「不完全な歴史」 ヒューストン写真センター、アメリカ
- 2000 「映像月間」 アルバール・シャノ造形美術センター、クラマール
「当代日本撮影家展」 上海サンヤ写真ギャラリー
「日本現代写真」 ボーフム美術館、ドイツ
- 2001 「イリュージョン: 日本の写真」 ストックホルム文化センター 他
「第17回東川町国際写真フェスティバル」 東川町文化ギャラリー、北海道
- 2002 「日本現代写真」 ラトヴィア写真美術館、リガ
「衣服の言語」 ブルゴワン=ジャリュウ美術館(フランス)
「日本写真協会賞受賞作品展」 富士フォトサロン、東京
「写真新世紀10周年記念: Futuring Power」 東京都写真美術館

- 2003 「第28回木村伊兵衛写真賞受賞展」 ミノルタ・フォト・スペース、東京
「浮世:日本当代撮影」 アウラ・ギャラリー、上海
- 2004 「六本木クロッシング:日本美術の新しい展望2004」 森美術館、東京
「アウト・オブ・オーディナリー／エクストラオーディナリー:日本の現代写真」 ケルン日本文化センター
- 2005 「MOT アニュアル2005:愛と孤独、そして笑い」 東京都現代美術館
「時代を切り開くまなざし:木村伊兵衛賞の30年」 川崎市市民ミュージアム
- 2006 「近代生活の画家たち」 ポンピドゥー・センター国立近代美術館、パリ
「コレクション4:アートの中の庭」 群馬県立近代美術館、高崎
- 2007 「異邦人たちのパリ 1900-2005:ポンピドゥー・センター所蔵作品展」 国立新美術館、東京
「日本現代美術フェスティバル」ヘイリ芸術村、韓国
「思考する身体」シカゴ文化センター、アメリカ
- 2008 「コレクション3:さまざまな肖像」国立国際美術館、大阪
- 2009 「第3回国際写真ビエンナーレ:意識の風景」 ボゴタ近代美術館、コロンビア
「彼女たち@ポンピドゥー・センター」ポンピドゥー・センター国立近代美術館、パリ

<受賞歴>

- 1991 第1回写真新世紀 優秀賞
1996 第21回コダック写真批評家賞 審査員特別賞(フランス)
2001 第17回東川賞 新人作家賞
2002 日本写真協会新人賞
2003 第28回木村伊兵衛賞
2006 ニエプス賞(フランス)

<パブリック・コレクション>

国立近代美術館・ポンピドゥーセンター、パリ市現代美術コレクション、フランス国立現代美術基金(FNAC)、フランス国立図書館写真コレクション、ゲラン財団美術館写真コレクション (Fondation Daniel et Florence Guerlain, France)、ヒューストン美術館、サンフランシスコ近代美術館、ハウスマルセイユ写真美術館/アムステルダム、上海美術館、三影堂アートセンター/北京、ソウル写真美術館、東京都写真美術館、栃木県立美術館、群馬県立近代美術館、国立国際美術館 その他

■展覧会に関するお問い合わせ

東京都写真美術館 事業企画課

- <展示担当> 岡部友子 t.okabe@syabi.com
三井圭司 k.mitsui@syabi.com 関次和子 k.sekiji@syabi.com
電話: 03(3280)0035
- <広報担当> 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 前原 貴子 t.maehara@syabi.com
電話: 03(3280)0034 FAX: 03(3280)0033

リリースに掲載されている図版のデータを、プレス掲載用にご用意しています。
ご希望の方は上記広報担当までお問い合わせください。